

佐藤佐太郎の蘇軾の嶺海詩への欣慕

—— 歌人の老境を支えた中国詩人の言葉 ——

加 藤 國 安

(漢文学研究室)

はじめに

私は、先に「歌人・佐藤佐太郎の蘇軾賛歌」と題する文章を報告した^①。そこでは、歌人・佐太郎が東坡を読むようになった経緯や、その受容の展開ぶりを概略的に示した上で、佐太郎の東坡理解の実態を具体的に探り、その特色を幾つか取り上げた。すなわち、厳密な学術的理解に汲々とするよりも、自らの関心によって味わう読書法であること。また蘇軾の詩文をもとに気ままな随筆や短歌にしたためることで、寂しい老境の中でも生きる喜びを造り出そうとしたものであること、さらには現代歌人の中で佐太郎ほど漢詩（蘇軾）を愛読し、自己の文学活動に漢詩を取り込んだ人もいないことなどが、その特色として指摘できる。

ただ、佐太郎が老境の中で深く傾倒した蘇軾の嶺海期（惠州・海南期を総称している）の作品との関係については、紙数の関係で言及することができなかった。小論では、この問題を中心に論じようと思う。この蘇東坡の嶺海期の作品がどんな思想をもち、またどんな境地を描いたも

のなのか。この点について、日本の学者の論は紹介の域を出ず、卑見のかぎりでは専論はまだない^②。中国でも、近年、ようやく論文が報告されるようになってきた段階である^③。しかし、佐太郎の場合は、今から二十余年も前にそれに関する文章を書いているというのみならず、歌壇界の重要な一人物の文章ということも、おおいに興味を引かれる所である。

一 蘇軾の惠州詩への傾倒

老歌人・佐藤佐太郎が深く愛読した蘇軾の文学とは、彼の人生のうちのこと晩年の作品だった。この背景には、佐太郎自身の強い老いの自覚があった。昭和四一年歳暮（五七歳）、鼻からの出血で入院して以来、佐太郎は急激な健康の衰えを感じるようになり、死をも意識するほどだった。これを機に、その後の彼の短歌には、しばしば老病や死を詠じたものが出てくるに至る^④。

暁の部屋にいり来しわが妻の血の香を言ふは悼むに似たり

六尺の牀によこたへて悔を積むための一生のごとくに思ふ
 『形影』 昭41)

悔多きわれの頂を撫づるものありとおもひて夜半にさめあき
 『開冬』 昭45)

『同』 昭48)

最後の歌について、佐太郎は「歌が出来たとき私は涙をながした。やはり体も心も弱っていたのだろう」(『及辰園往来』『辛夷の苔』)と記している。昭和五〇年(六六歳)四月、今度は脳血栓で入院した。その時の歌には、次のようなものがある。

衰へしわが聞くゆゑに寂しきか葦の林にかよふ川音

もてあそび難き余齡とおもはんか鹿島港のあたり寂しく帰る

『天眼』 昭50)

脳血栓により、佐太郎は「言語も足もやや不自由」(『天眼』後記)となっている。佐太郎が蘇軾を中心とする漢詩を愛読し、その随筆『及辰園往来―蘇東坡雑感―』(求龍堂 昭51年4月)を書いたのは、まさにこの老病と切実に向かい合いつつ、それからの慰藉を懸命に希求していた時期だった。この随筆は、昭和四十七年三月から五〇年七月まで、『歩道』に連載されたものである。

一方、蘇東坡は、紹聖元(一〇九四)年、五九歳の時に惠州(広東省)に左遷され、同四年にはさらに遠くの海南島に左遷されている。この惠州以後の嶺海期の諸作品は、深い挫折感との葛藤を経て、大きな諦観が現れてくるのが特色だが、佐太郎はこの時期の蘇軾のことばに格別の境地を発見するのである。その具体的な内容については、まだ詳しい報告

がないように思われる。そこで、今、佐太郎の随筆『及辰園往来』に沿って考察してゆこうと思う。

まず「蘇東坡のこと(一)」だが、ここでは惠州左遷後の蘇軾の「白鶴山の新居、井を鑿つこと四十尺にして、磐石に遇う。石尽きて乃ち泉を得たり」(『蘇軾詩集』巻40 孔凡礼点校 中華書局 82)という長編の詩(五言二十四句)を掲げ、その詩的妙趣について語る。今は、その中の最も重要な部分のみを引こう。

21 我生類如此 我が生 類ね此の如し

何適不艱難 何ぞ適くとして 艱難ならざらん

一勺亦天賜 一勺 亦た天賜

24 曲肱有余歛 肱を曲げて 余歛有り

まず、この詩の全体の要旨から述べるならば、次のとおりである。「海の国」惠州はひどく蒸し暑い地なので、高台の涼しいところに「新居」を構えた。しかし、水を運ぶのに難儀し、四人の人夫を雇い地下水を掘らせることにした。数丈ほど掘り下げた所で岩盤にぶつかり、以後、仕事が進まなくなった。が、蘇軾は行き詰まっても諦めず、人夫らに酒食をたくさんふるまい、さらに精を出すように要求した。やがて岩を突き抜け、そして待望の水が出てきたのである。―これを見ての蘇軾の感慨が、右の詩(第21句〜24句)である。今、その意味を掲げるならば、

21 ワシの人生って だいたいこんなもの

どこへいっても 苦難がついてくる

けれど 不思議なもの

どうにか得られた 一すくいの水が

これは まさに天の恵み
24肘枕しながら 浸るのさ

汲めども尽きぬ この喜びに

一読して、蘇軾の挫折感及びそれと同居する静かな喜びの情とが読み取れる。が、さらによく読むと、挫折感に負けずに前向きに生きていく蘇軾の心のありようが見えてくる。そうした蘇軾の詩を踏まえての佐太郎の言は、次のようである。

達観してうらむ色のないのはいかにも東坡らしい。泉を得て喜ぶ詩で、「何ぞ適くとして 艱難ならざらん」といって、つづけて「一勺亦た天賜」というのが、東坡における人生であった。どんな逆境にあっても天をうらまず、人をうらまず、悠々として日を送ろうとしたらしい。

また、後年、惠州を訪ねた時に、この詩を踏まえて作ったのが、

蘇東坡の掘りたる井戸は八百年いま学校の屋内にあり

〔「天眼」 昭55〕

である。本詩に佐太郎が深く引かれたことが分かるが、彼がまずもって注目したのは、人生の艱難を受け容れて、「うらむ色のない」蘇軾のその姿勢である。そして、その結果として、蘇軾が「悠々として日を送る」ことができたことに賛嘆するのである。

佐太郎は、またこういう、

なまなましい世間に生きているとそういう感情（この前に、「人をうらみ、ねたみ、そねむという気持」とある一筆者）はまったく去来しないというわけにはゆかない。私の内部にも煮えたぎる地獄がある。それをしずめるものは宗教だが、宗教は実践がなければならぬ。私には素直に実践に入ってゆけないところがある。私はいつからか蘇東坡をまねて生活を統一する心術を得たいと思うようになった。私は東坡の力をかりて辛うじて平安の日々を保っているようなものだ。

〔「及辰園往来」「変を弄ぶ」〕

と。現代の我々にとって、「うらむ色のない」悠々たる日々などというものは、ますます幻想でしかなくなっている。現代人とは、複雑な制度や画一的価値観のもとで、悲しいかな、社会をうらみ、他人をうらみ、自己の運命をうらみと、いたるところで不平の渦に吞まれている悲しき存在者である。そんな薄っぺらな人生行路しか歩めぬ現代人にとって、佐太郎の貴重な先例は、我々の共通の課題に対する希望の日差しのように映る。

佐太郎はまた、右の詩の「我が生 類ね此の如し／何ぞ適くとして 艱難ならざらん」の句を、「実にいい」と評した上で、

このように、すべすべとして流麗だというのでなく、重い感慨が突如として現われるのが蘇東坡の本領である。平凡な詩人のくわだて及ばない境地だろう。

と述べる。そして、一般の人が「蘇東坡には議論が多いというが、議論でもこのように人生を見すえた感慨として出ている場合が多いので私に

は苦にならない」と、井戸堀のような作業からさえ、ふと「人生を見ずえた重い感慨」の哲学的ことばを生むことに、詩人としての非凡な資質を看取し、その文学に大きな喜びを発見するのである。かくて、「内部に：煮えたぎる地獄」を抱える佐太郎だが、「東坡の力をかりて辛うじて平安の日々を保つ」のである。彼は、

……こんな失敗は私にはいくらでもある。しかし老境だからそれもないかたがない。人をうらまず、自分をうらまず、悠々と日を送ることにしよう。

〔及辰園往来〕「今日騰々」

「議論」、すなわち批評眼をもった見解を多く述べるのは、宋詩の基本的な特徴だが、蘇軾の場合は、それが皮相的なことばに上滑りせず、「人生を見ずえた重い感慨」として表されているために、浅薄な理屈っぽさから免れている。蘇軾の詩は、いわば思考力をもった抒情の造型となっているのである。このような詩歌について、佐太郎がまだ蘇軾と本格的に出会う以前の、初期の歌論には次のように述べられる。

本来の詩は知性をも批評をも既に抱撰して、それを越えている。亦それであるから、この力が深く働けば詩はおのずから思想的になるので、肉体化した思想というものはこの直観の中にある。

〔純粹短歌〕昭27)

この歌論の中に、後年、佐太郎が蘇軾に出会う下地がすでにあつたとがうかがえる。そうした蘇軾の議論のある「重い感慨」の、もっと詳しい内容を把握できれば、我々としては、佐太郎の蘇軾賛歌の本質に迫

ることができるとはいかない。

また、こういう佐太郎の注視というのは、とかく現実の中から「重い感慨」を遠ざけようとする現代人にとって、まるで正反対の道を行くように見える。何事にも軽いこと―これが現代人の一般性であり、同時に浅薄さの本質といえるだろう。が、それぞれの重さを受け容れながら、少しでも前向きに歩んで行くことができるなら、そこからまた新たな可能性が開けてくるはずだ。そういう希望の哲学をもった「重い」文学、それを人類の文学史から再発見し、人々に明示すること。―それが、今日の我々の文学研究の一つの大きな課題となっている。

二 蘇軾の海南島の作品の妙趣

それを検討する前に、もう少し佐太郎の嶺海期の蘇軾理解を押さえておくことにする。次は、「蘇東坡のこと(二)」の場合である。これは、さらに遠方の海南島の儋州たんに流されていた時の蘇軾の詩についての随筆である。その中に掲げられる詩とは、次のようなものである。

「贈姜唐佐」

「姜唐佐に贈る」〔蘇軾詩集〕卷48)

生長茅間有異芳	茅間に生長して	異芳有り
風流稷下古諸姜	風流	稷下の古諸姜
適從瓊管魚龍窟	適 <small>なま</small> たま瓊管	魚龍の窟より
秀出羊城翰墨場	秀出す	羊城 翰墨の場
滄海何曾斷地脈	滄海	何ぞ曾て 地脈を断たん
白袍端合破天荒	白袍	端 <small>まさ</small> に天荒を破るべし
錦衣他日千人看	錦衣	他日 千人看て
始信東坡眼力長	始めて信ぜん	東坡の眼力 <small>ま</small> の長れたるを

在野に 成長したのに

なかなかの逸材だね 姜さんは

その風流ぶりは まるで 同じだよ

いにしへの 齊の稷都しよくとで

隆盛築いた 人々に

彼らも 姜姓 名乗ってた

たまたま 瓊州の

水辺から現れたが

広州の文壇に 登場するや

傑出した力を 示されて

島と陸との間に

横たわる 青い海

けれど 地脈まで

どうして断つこと できようぞ

白い袍着て 受験した日には

みごとに 及第し

破天荒の誉れを 得ましようぞ

いつの日か

錦をはおり 帰郷すれば

その晴姿を見て 人々は

はじめて 納得するのさ

この東坡の すくれた眼力を

この詩を上げて、佐太郎はこう記す。

しかし、私が問題にするのは一篇の詩ではない。「滄海何ぞ曾つて地脈を断たん」という一句である。この句は姜唐佐を上げます言葉だが、また絶海の孤島に起居する蘇東坡の感慨でもある。海南島に流された東坡は、王敏仲にあたえた書簡に：（略）：…いつているように、生きて帰られるとは思っていなかったらしい。しかし「水到渠成」という心境は挫折しなかった。青々とした海にへだてられているが、地脈は断たれているのではない。地脈は海底を通過して大陸と島をつないでいる。この感想の豪壮さというものは驚くべきものではあるまいか。この一句だけでも蘇東坡という詩人はたいしたものだと思う。

海南島といえ、広東の沖合の島である。海で隔てられ、大陸の音信はきわめて入りにくい。また海南島の不慣れた気候への危惧も強かったろう。もう生きて帰れぬのではという不安もあったが、それでも島と大陸は地脈で繋がっていると考えて、望みをつなぎ続け諦めなかったのである。つまり佐太郎は、どんなにどん底にあっても希望を捨てぬ、蘇軾の前向きな心に強く引かれるのである。彼はまたこうもいう、「こんな調子の高い言葉はそうざらにあるものではない」（『及辰園往来』「座右の書」と。そして、長年の途絶を越えて結ばれた日中国交回復の折の、日本側の発言にこそふさわしかったのにと惜しむ。含蓄に富む中国古典を現代的視点で巧みに捉える、佐太郎のしなやかな感性が目を引く。

三 蘇軾の詩の心を求めて

では、佐太郎にとって、蘇軾の嶺海期の作品がこれほど大きな意味をもったというのは、なぜなのか。この時期の蘇軾のどんな生き方に感銘を覚えたのだろうか。その一つの理由を記したものが、「変を弄ぶ」と題する一文である。この中で、佐太郎は、次のようにいう。

蘇東坡はあるとき夢の中で神仙道術を論じた詩を作った。夢中の四句に覚めてから四句を作り足した詩がある。その終わりの句は「不聞不見我何窮」という。私はそれを座右の銘にしている。……

東坡はほとんど言語に絶する対人関係の苦杯をなめながらうらむところがなかった。「不聞不見我何窮」という態度で悠々と日を送る事が出来た。東坡は「宝繪堂記」で「君子可以寓意於物、而不可留意於物」（君子は以て意を物に寓すべし、而れども、意を物に留むべからず）ともいつている。こういつたのは熙寧十年四十二歳の時だが、物に意を寓して、物に意を長く留めないという態度は晩年になっていよいよ徹底したようにみえる。

この「不聞不見我何窮」という句は、もとは「十一月九日夜、夢に人と神仙の道術を論じ……」詩（『蘇軾詩集』巻39）の中のことばである。「神仙の道術を論じ」て作った詩だから、道教的な内容をふくんでいるが、この「不聞不見」という行為も、そうした道術の一つである。日本風にいえば、日光東照宮の三猿のように、「見ざる、聞かざる」という態度でいけば、どうして窮地に立たされるかがあろうか」というわけである。しかし、余計なことには関わらないように努めても、どうしても関わりざるをえない場合もあろう。その時には、「宝繪堂記」（『蘇軾文集』巻

11 中華書局 86）にいうように、その事柄に「長く思いを拘泥させぬようにする」ことが肝要だという。佐太郎はこうもいう、

俗に「見ざれば清し」とか「知らぬが仏」とかいうのと同じだが、全く同じでもない。はじめから聞かず見ずにいるのは無知というものである。聞こえるものを聞き、見えるものを見て、しかもそれこだわらないのが「不聞不見」だろう。

つまり、我々はこの人間社会で暮らしている以上は、いろいろなものを見聞きせざるをえないが、その上で、「聞かなかつた、見なかつた」と同じ自由な精神を失わないでいること、そういう縛られない自由な心のあり様を、「聞かざる、見ざる」と述べているのである。そこから蘇軾の悠々たる生き方は、生まれてくる。そして、佐太郎の蘇軾欣慕の理由も、まさにここにある。

佐太郎は、さらにこうも述べている。

東坡は惠州に来てから書齋を「思無邪齋」と命名した。「思無邪齋銘」を作って、その詞書で、

「夫れ思あるは皆邪なり、思なければ則ち土木なり。吾、何ぞ自ら道ふを得ん。其れ惟だ思ありて思ふ所なからんか。是に於て幅巾危坐し、終日言はず。明目直視して、見る所なし。撰心正念し、覚ゆる所なし。是に於て道ふを得たり。」（原文は白文を掲げるが、略す―筆者）

といている。これと同じ心の据えかたが、「不聞不見」にもあるだろう。「明目直視而無所見」がそれだ。

この「思無邪斎銘」(『蘇軾文集』卷19)は、もともと弟の蘇轍との仏法談義を踏まえて書かれたものだけに、論理は深遠でかなり掘みにくい。「思あるは皆邪なり」「思ありて思ふ所なからんか」「見る所なし」「覚ゆる所なし」など、簡略化された言い回しの中に含む意味は、きわめて深い。今、かりにその要旨を述べるならば、

胸に思いが湧いてくると、それは皆、世俗の人間臭い考えばかりだ。また思いが湧いてこない、まるで「木石」になつたみたいだ。これでは、ワシはものを言うことができぬ。思いが湧いてきても、その中に何か思う所がないようにはできないものか。そこで一日中きちつと座つて、ものも言わずに考えてみた。すると、明らかかな目で物事を直視し、曇つたものは見ないようになった。また心を乱さずにしじつと思いを澄ませていくと、含むようなものは思わないようになった。

というような所だろう。また同様のことは、次の詩句にも述べられる。

茸為無邪斎 茸して 無邪斎と為し
思我無所思 思う 我が思う所無きを

(白鶴の地に 移り住み)

そこに建てた 家

無邪斎という 名前

何も思わないでいたい

そういう思いなのさ

(陶の「移居」に和す 二首「其一」)

佐藤佐太郎の蘇軾の嶺海詩への欣慕

最遠の地への左遷だっただけに、蘇軾の中には深い挫折感や寂寞があったはずだ。しかし、蘇軾は自己の置かれた抑圧的かつ敵対的な状況の中で、自身を疎らせず、暗い心象より己を解放するためには、内面的な苦悩を文学的に処理する高度な方法を見付け出さねばならなかった。悲劇に萎縮せず、また卑屈にならず、むしろそういう淵から自身を解放せねばならなかった。それが、己の中の「邪氣」を捨て、無の境地に至ることだったのである。言葉を変えていえば、世俗的な価値を越えて、宇宙的全体性に結ばれた自己放下に踏み入ることだった。人生最大の苦境の中、蘇軾は、人間社会の価値が宇宙のごく一部分にしかすぎぬことをよく見定め、宇宙的真理の満ちる世界へとしなやかな脱出を試みたのである。そういう蘇軾の文学は、人間社会の縮図であつてはならず、むしろ宇宙の相似形でなければならなかった。こう考えてくれば、右の「不聞不見」という言葉の意味は明らかである。これを表現行為と関連づけて捉えれば、表現者の中に生起してくるさまざまな意識をよく省察して、邪氣的なもの、世俗的なものは、あえて表現しないという態度なのである。

かくて、この嶺海期になると、蘇軾の詩歌には、何物にもとらわれぬ自由な精神が繰り返し述べられる。今、ごく一部の例を掲げるならば、

無心但因物 無心 但だ物に因る
万変豈有竭 万変 豈に竭くる有らんや
醉醒皆夢耳 醉醒 皆 夢なるのみ
未用議優劣 未だ優劣を議するを用いず

影は もとより無心

ただ物によって 生ずるだけ

物が どう変化しよう

影は つきぬ

酔うても 醒めても みな夢よ

優劣なんて あるわけない

〔陶の〈影、形に答うる〉に和す〕

天人同一夢 天人 一夢を同じうし

仙凡無両録 仙凡 兩つながら録する無し

天界も 人間社会も

おなじ夢の世界

仙人とか 凡人とか

別に 言うほどでもない

〔高要令の劉湜の…に次韻す〕

吾生本無待 吾が生 本より待つ無く

俯仰了此世 俯仰 此の世を了す

ワシは 自分の生涯つてもものに

何も 期待はしておらん

ただ気ままに 世界つてやつを

眺めながら この世を終えたいだけ

〔遷居〕

寂しさは暗闇を生む。そこから、さらに寂しさは広がっていく。そんな心には、意味のないあきらめばかりがのさばっている。そうした時、

人はどうやって活路を切り開けばよいのだろうか。それは、老境の寂し

さに襲われた佐太郎にとっても、切実な問題だった。その佐太郎が心を

引かれたのが、この南遷者・蘇軾の心路歷程を綴った作品だったのであ

る。嶺海期の蘇軾は、権威とか、名声とか、そういう人間世俗のものを

捨て去り、貧困や無名しかない辺境の暮らしを前向きに受け入れること

を通して、もっと広大な世界の中に自身を位置づけ、世俗の言語領域を

越えた次元で豊かな諸関連を見付け出す。いわば意味のあるあきらめを、

日々止まずに実践するのである。ここから、些細な小事からさえ、宇宙

的言語の響きを成立させる、嶺海期の蘇軾の詩が生まれてくる。裏を返

せば、豊かなイマジネーションを喚起して、自己と結ばれた新たな関連

を表出する蘇軾の非凡な言語領域こそが、彼の詩人としてのスケールを

決定しているといえよう。蘇軾のこのような作風について、佐太郎はこんな発言をしている。

東坡は「遠韻」がなければならぬといい、言葉は煙霞の気を帯びて

いなければならぬというが、東坡の詩には、通俗の気がない。

〔『及辰園往来』「蘇東坡の〈あそび〉〕

さらに、佐太郎は、「不聞不見我何窮」という詩句を踏まえて、こ

んな短歌を作っている。

聞かず見ずありて安けく過ぎなんを病み臥すときに窮るらしも

平生、「聞かず見ずありて安けく過」としているつもりなのだが、しか

し、「病み臥すときに」は、さすがに「精神が安定しない」というので

〔開冬』昭48〕

ある。この歌の中に、佐太郎がいかに蘇軾の心を生き、日々の暮らしをともにしているかがうかがえるのである。

四 変わることを喜ばん

こうした蘇軾の生き方は、四十代頃より見られるようになり、黄州で一氣に深まりを見せ、晩年、辺境の惠州、さらに海南島へと左遷されると、それは確固とした安心立命の境地へと純化されていく。蘇軾のこのような生き方が、「言語に絶する対人関係の苦杯」の中で貫かれたものであることは、きわめて注目される。佐太郎は、ここに大きな関心を寄せたのである。その「苦杯」とは、どのようなものだったのか。ここで簡単に言及しておくことにする。

「蘇東坡のこと(二)」で、佐太郎は王敏仲に与える書簡というのを引いている。これは、「王敏仲に与う 十八首」(『蘇軾文集』巻56)の其十六にあたるものだ。

某、老に垂んとして荒に投ぜられ、復た生還の望みなし。昨、長子の邁と訣れ、已に後事を処置す。今、南海に到る。首に当に棺を作り、次いで便ち墓を作るべし。乃ち手疏を留めて諸子に与う。死すれば即ち海外に葬れと。

ここには、海南島に流された蘇軾が、生還の望みはないとして前もって遺言し、いよいよ島に渡ると、まずお棺を造り、ついで墓を造らねばと思ったことが記される。蘇軾は、それほど覚悟をしなければならなかったのである。

このような蘇軾の覚悟の言は、いろいろな所に見いだされる。佐太郎

には言及がないが、次のような資料も残されている。

「昌化軍に到るを謝する表」(『蘇軾文集』巻24)

臣、孤老にして託する無く、瘴癘の交ごも攻め、子孫は江辺に慟哭し、已に死別を為す。魍魅の海外に逢迎すれば、寧んぞ生還を許さん。

これは、紹聖四(一〇九七)年、蘇軾が瓊州別駕・昌化軍安置になった時のものだ。すなわち、海南島への任官を感謝する文だが、ここでも氣候の悪さゆえに、生還の希望はなく、「すでに死別を為した」も同然との厳しい認識が述べられている。同様のことは、また「試筆自書」(『蘇軾文集』佚文彙編 巻5)にも記される。

吾、始めて南海に至り、天水の際無きを環視し、悽然として之を傷んで曰く、「何れの時か、此の島を出づるを得ん」と。

宋・朱弁撰「曲洧旧聞」巻五に収録する佚文である。四方どこまでも海が広がる海南島にやってきて、もう帰れぬことを嘆く蘇軾の痛ましい言葉を収録している。さらに、佐太郎自身「傑作だと思ふ」(『及辰園往来』「夢中の詩」と評した「瓊儋の間を歩き、肩輿に坐睡す」詩(『蘇軾詩集』巻41)にも、こう詠じられる。

05 登高望中原	高きに登って	中原を望めば
但見積水空	但だ見る	積水の空しきを
此生当安婦	此の生	当に安くにか帰るべき
08 四顧真途窮	四顧すれば	真に途の窮まる

高いところに登り

中原の方を 眺めてみても

ただ果てしない 水ばかり

ワシはいつたい いつ帰れるのやら

四方を見回し ただ嘆く

われ ここに窮すと

右は、詩の第五、八句の部分のみだが、海に囲まれた海南島で、己の道の窮まったことを嘆いたものである。この島で、自分の人生は空しく終わるのだと、蘇軾はそう思っただろう。実際、海南島での日々はかなり悲惨なものだった。それを窺わせる有名な資料が、「程秀才に与う三首」其一（『蘇軾文集』巻55）で、これは海南島の蘇軾を論ずる際によく引かれる文献である。

此の間、食べるに肉無く、病みて葉無く、居るに室無く、出でては友無く、冬には炭無く、夏には寒たき泉無く、然して亦た未だ悉くは数うること易からず。大率は皆無きのみ。惟だ一幸有り、甚瘴無きなり

要するに、この島には必要なものがほとんど何もなく、この島で生活するのは、ただ一つの幸運は、マラリアがないことだけだった。蘇軾は、こんな辛苦の日々を余儀なくされたのである。

しかし、こんな島ではあったが、いざ暮らし始めてみると、蘇軾の心はまたしても前向きなものを発揮する。これについて、佐太郎は、「こういう生き方が可能だった」のは、「詩人として〈物の変を弄ぶ〉ことが出来たから」だったのではないか、という。この「物の変を弄ぶ」と

いう言葉に、佐太郎は強い関心を寄せる。この言葉は、惠州での作、「江郊」詩（『蘇軾詩集』巻38）の中にあるものだ。

意釣忘魚 釣を意おもいて 魚を忘れ

楽此竿綫 此の竿綫を樂しむ

優哉悠哉 優なる哉 悠なる哉

玩物之變 物の変を玩ぶ

釣りはしても

魚のことなんか

どこかに 忘れてる

ただ竿の糸 垂れているだけ

でも こうしていると

サッパリ 忘れられる

世の中の 嫌なことなど

ああ じつに 悠然たる気持

ほんとうに 楽しいよ

いつもと 違うことするのは

この「物の変を弄ぶ」とは、換言すれば、ある一つの心の状態に凝り固まらずに、気持ち切り変えて、のびやかな心のあり様を回復し、今を楽しく過ごすことといえよう。そのために、蘇軾は釣りに行ってみたい、いろいろな地酒を飲んでみたい、井戸水が出たなら喜びの詩を書いてみたい、陶淵明の詩に和してみたりと、周囲にある何げない事柄から、次々に喜びの素材を見つけ出すのである。蘇軾の全集をひもとくと、かなりの作品が快活な調子のため、よほど充実した気分の中にあっただ

はと錯覚してしまいそうになるほどだ。

が、蘇軾の置かれた状況や鬱屈した心情からして、それは無論、あえて作り出された楽しみなのである。「死別」を覚悟するほどの重苦しい現実の中での、この前向きな明るさ。まるで奇跡が起きたかのような、この変化。こういう生き方が可能になったのは、なぜなのか。佐太郎は、それは「詩人として〈物の変を弄ぶ〉」ことが出来たから」だという。この発言をもっと掘り下げていくと、いろいろな視点に逢着することができる。たとえば、

- ・ 詩人とは、変化の味わいをよく理解できる人間のことをいう
- ・ 人生の妙味は、この変化を受け入れる人に訪れるものである
- ・ すぐれた詩歌の秘密は、新しい真実への自己変容を通して示される

等々。佐太郎の蘇軾欣慕の諸相を探索してゆくと、老病の苦しみや死の不安からの解放を求めて耽読していくうちに、次第に、詩歌を職業とする彼自身の、限らない文学探求心が刺激されてくる様子がうかがえる。古い自己の解体、そして絶えざる新たな自己の再構成をめざす者のみによって発見されてくる、さらに新しい地平。それが、自己の前に人間的虚飾のないことばとなって整列し出すのを待ち受ける時、蘇軾と同じ天来の言葉の秘蹟は訪れる。歌壇の長老は、みずからの短歌人生にともなう雑念を捨て、純粹詩歌そのものをこそ欲したのに違いない。それは詩人蘇軾の晩年の世界への大変化を意味する。かつて、佐太郎はこう述べた、

・ 真の新しさはみられる対象（素材）にあるのではなく、見る主体にあるのである。見られるものにある新しさは失われる新しさである

佐藤佐太郎の蘇軾の嶺海詩への欣慕

が、主体を通して見られた新しさは失われることのない新しさである。

・ 詩は変化することによって、新しいのではなく、真実の「発見」によって新しいのである。

〔純粹短歌〕

この壮年期の言葉は、晩年の佐太郎にとって、真に深い意味をもつものとなったといえよう。

おわりに

以上、蘇軾の嶺海期の詩文を、老病の歌人佐太郎がいかに理解し、吸収し、また同化したかについて考察してきた。小論ではとくに、これまでの佐太郎研究で取り残されていた、蘇軾の文学内容の分析を行い、それを佐太郎がどう受容したのかについて検討した。その結果、老病と死の不安、孤独・寂寥感にさいなまれる中で、佐太郎が晩年の蘇軾の文学に深く心を寄せ、そこに静かな慰藉を得るようになり、ひいては彼の本業たる短歌の創作活動にまで大きな影を落とすこととなった様子が、相互比較的な視点により見えてきたように思う。この作業を終えた今感ずるのは、佐太郎という人の読解の深さ、着眼の卓抜さである。それは、今日、中国の研究者がようやく報告するようになってきた、この蘇軾の嶺海期の文学に関する専門的な論文と、内容的にはほとんど変わらないのである。このテーマに関する成果が未だしの状況にあった二十年ほど前に、漢文には素人の一介の歌人が、ここまで蘇軾を理解していたというのは一つの驚きである。

ただ、今回取り上げた蘇軾の作品は、佐太郎が平生愛読したもののご

く一部にすぎない。彼は、何度も丁寧に蘇軾の詩文集に目を通し、そこからこのような先駆的な蘇軾嶺海期論を著したのである。当然、彼の蘇軾理解はこんなものではおさまらない。佐太郎は、蘇軾の心の軌跡にもっと多彩に触れ、その文学活動の根底にある思想を理解し、やがては歓喜の詩が生まれるまでをしつかりと捉えていく。小論では、おもに蘇軾の事跡面の理解を中心に検討したが、そういう蘇軾の思想と創作の本質的關係については、十分に述べることができなかった。これについては、また別に論ずることとしたい。

注

(1) 『愛媛国文と教育』31号(愛媛大学教育学部 98)を参照されたい。

(2) 佐太郎の蘇軾理解については、以下の報告がある。

片山貞美「『及辰園往来』読後」『短歌』23巻9号 76)

菊沢研一「蘇東坡と佐藤佐太郎」『惠州詠私考』

『短歌』特集・佐藤佐太郎 28巻5号 81)

秋葉四郎「佐藤佐太郎と漢詩・蘇東坡」

『短歌』特集・佐藤佐太郎 35巻3号 88)

ただし、これらの報告は、佐太郎の蘇軾理解の委細については、すべて後日に期している。

(3) 近年、次のような論文が報告されている。

謝桃坊「嶺海時期—平淡風格の完成」

(同氏『蘇軾詩研究』所収 巴蜀書社 87)

張海浜「論蘇軾嶺海時期的思想与創作」『寧夏大学学报』89—1)

李越深「蘇軾嶺海時期的心態模式」『北方論叢』89—4)

周偉民「流放者の心路歷程」『海南大学学报』92—2)

蒲友俊「超越困境—蘇軾在海南」『四川師範大学学报』92—2)

冷成金「蘇軾嶺海時期的思想与实践」『中国人民大学学报』93—2)

朱靖華「天地精神境界—評蘇軾嶺海時期的“人生反思”」『新東方』96—6)

また『全国第八次蘇軾研討會論文集』(儋州市人民政府 蘇軾学会合編 96)は、海南島で開催された蘇軾学会での論文集で、嶺海期の文学の諸問題が中心的に取り上げられている。

(4) 佐太郎の老病の問題については、主な報告として以下のものがある。

清水房雄「十首抄—『形影』『開冬』から」

『短歌』特集・佐藤佐太郎 28巻5号 81)

長沢一作「『天眼』とそれ以後」(同右)

梶木 剛「佐藤佐太郎の芸術—とくに晩年」

『短歌』特集・佐藤佐太郎 35巻3号 88)

本林勝夫「佐太郎の世界—晩年の歌境」(同右)

篠 弘「佐太郎の晩年の達成」(同右)

今西幹一「佐藤佐太郎の短歌の世界」(桜楓社 85)

(5) 拙稿「蘇軾の嶺海期の悟達の詩学」『東洋古典学研究』第六集 一九九八年秋 刊行予定)を参照されたい。

(一九九八年四月三十日受理)